

《一般に貴女のことを御という。思うに「御」の字を夫人・女御の意に取ったものと思われる。参議藤原氏は弁官を兼任していたので、其の娘を「弁の御」（弁官の姫君）と呼んだのだ》。

15 彼らの父親は共に上流貴族で

16 その当時は傲りたかぶり、人を見下していたものである。

17 お金も泥土のように惜しみなく使い果たし、

18 今では一食一食の食事さえ、こと欠くありさまである。

19 お前達を（そんな）彼らと比べると、

20 天の思いは非常に寛大で優しい（と感謝すべきである）。

## 補説 ①

この詩の背景を知れるものとして、川口久雄氏や柿村重松氏を始めとする先学が指摘する次の『大鏡』の一文がある。

### 「『大鏡』左大臣時平傳」

右大臣の御覚えことのほかにおはしましたるに、左大臣やすからず思（おぼ）したるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこと出でて、昌泰四年正月二十五日、太宰権（だざいのごんの）帥（そち）になしたてまつりて流されたまふ。